

# サポート

No. 200

令和6年3月22日発行

県教育庁特別支援教育課指導チーム

## 祝 卒業

雪が少なく例年より暖かな冬が過ぎ、3月を迎え、県内の各特別支援学校では、卒業式が行われました。今回はその中から、秋田きらり支援学校、比内支援学校、大曲支援学校の卒業式の様子を紹介します。

### 秋田きらり支援学校

まさに、この「はれの日」を祝うかのような晴天の中、令和6年3月8日（金）、秋田きらり支援学校では、小学部5名、中学部7名、高等部6名、計18名の卒業式が行われました。

式辞では、新井敏彦校長から「卒業する18名のみなさんは、各学部の最高学年として、学校生活のあらゆる場面でリーダーシップを発揮し、大いに学校を盛り上げてくれました。皆さんへお渡しした卒業証書は、全力で最後まで頑張り通したことの証明書です。」と伝えました。そして「校歌にあるように、『きらり 輝く』未来に向かって、『翼を広げ 翔（かけ）て』いきましょう。」と結びました。

答辞では、卒業生を代表して生徒会長が「友だちの笑顔は、私の宝物です。」「在校生の皆さん、これからも夢や希望をもって学校生活を楽しんでください。」と在校生に心を込めたメッセージを送りました。

卒業式の終了後に門出送りが行われ、「おめでとう」のお祝いの声と、大きな拍手の中、18名は次のステージに巣立っていきました。

（秋田きらり支援学校 教頭 佐藤 茂樹）



校長式辞



卒業証書授与

### 比内支援学校

令和6年3月8日（金）、はれの日にあふさわしい青空のもと、比内支援学校では、5年ぶりに21名の御来賓をお迎えし、小学部4名、中学部17名、高等部18名の卒業式が行われました。

厳かな雰囲気の中、鎌田裕之校長より一人一人に卒業証書が手渡され、それぞれが立派に受け取りました。鎌田校長の式辞では、各学部の卒業生のこれまでの取組における児童生徒の成長した姿の紹介のほか、「コロナ禍にあり、感染症対策による活動の自粛や制限等によりストレスもあったかと思うが、そのような中でも自分たちができることを考え、実践し、『地域と共に』という学校の伝統を意識し、つないでくれたことをうれしく、誇りに思う」とお話がありました。終盤の全校児童生徒による「呼び掛けと歌」では、各学部の卒業生がこれまでの思い出を振り返って発表し、感極まり涙したり、在校生が卒業生に向けて感謝の言葉を話したりしました。歌「旅立ちの日に」で締めくくり、保護者席から自然と拍手が起こるなど、大変感動的な卒業式となりました。式終了後は、各学部で5年ぶりとなる保護者主催の「卒業を祝う会」が行われ、卒業生、保護者、職員が一緒にこれまでの出来事を振り返り、楽しいひとときを過ごしました。

（比内支援学校 教頭 佐藤 香代子）



校長式辞



卒業証書授与

## 大曲支援学校

令和6年3月8日(金)、秋山台に降り注ぐやわらかな光に春の訪れを感じながら、大曲支援学校では令和5年度の卒業式が行われました。今年度の卒業生は、小学部1名、中学部7名、高等部14名の計22名です。カノン(パッヘルベル)のピアノ伴奏に合わせ、卒業生がやや緊張しつつも堂々と入場すると、会場全体が祝福の雰囲気に包まれました。

卒業証書授与では、卒業生全員が壇上で鎌田誠校長から卒業証書を丁寧に受け取り、保護者や在校生、職員がその晴れ姿を温かく見守りました。

鎌田校長は式辞で、小学部、中学部、高等部の卒業生それぞれに学校生活での頑張りを讃えるとともに、「自分を信じ、しっかりと前を見て自分の道を歩いて行ってください。皆さんには無限の可能性があり。さあ、勇気を出して一步前に踏み出しましょう」と力強いエールを送りました。それを真剣に聞き入る卒業生は、これからの自分の未来に思いを馳せ、瞳を輝かせていました。最後に、皆で声高らかに「校歌」を斉唱し、卒業生の清々しい門出に華を添えました。

(大曲支援学校 教頭 浅沼 和子)



校長式辞



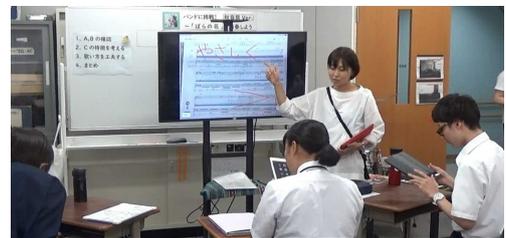
卒業証書授与



## ICT活用実践紹介

### 自立活動の視点によるICTの活用の取組について ～個別最適な学びの環境をつくることを目指して～

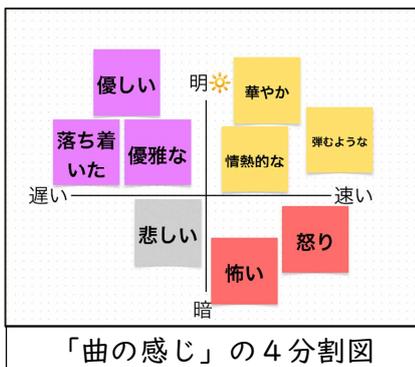
今年度、本校高等部普通科の音楽では、対話的な学びを重視し、曲の表現方法について生徒間で話し合い、歌い方や演奏の仕方を決定する活動を軸に授業を展開しました。話し合いが活発になるよう、「曲の感じを表す言葉」の4分割図の使用を計画しましたが、弱視と全盲の生徒の共有方法が課題でした。そこで、iPad標準搭載のアプリ「フリーボード」のホワイトボード上で4分割図を扱い、弱視生徒は拡大機能、全盲生徒は画面読み上げ機能を使うことにより、「曲の感じを表す言葉」を同時に確認できるようにしました。付箋の位置からも言葉のイメージを共有することができるため、考えを伝え合いやすく、曲の表現方法の一つにまとめる話し合いを実現することができました。



高等部普通科の音楽の授業

日々進化する端末やアプリを活用することによって、文字を音声読み上げする、信号機の位置を知る、公共交通機関の運行時間を知るなど、視覚障害があっても以前より情報を入手しやすくなりました。本校では、個人所有のPC、iPhone・Android、プレクストーク(デイジー図書再生機)等も学習活動に組み入れながら、個別最適な環境を探っています。「今までできないと思っていたことができた」という体験は、児童生徒の自信と主体性につながっています。

(視覚支援学校 教諭 長谷川 絵里)



## 高等学校における特別支援教育の充実に向けて

～高等学校特別支援チームによる校内支援体制の機能向上に向けた取組について～

今年度から名称を変更した「高等学校特別支援チーム」では、教育、医療、福祉、労働の関係機関の委員で構成する特別支援チームとその事務局を県内3地区に設置し、個別の教育支援計画、個別の指導計画等を活用した高等学校への相談・支援を通して、校内支援体制の機能向上を図っています。

文部科学省による令和4年の「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」は初めて高等学校についても行われ、学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒は、小・中学校で8.8%、高等学校で2.2%という結果でした。ある高等学校の職員向け特別支援教育研修会と本荘由利地区の高等学校初任者研修で、この数値をどう思うか尋ねたところ、多くの先生方が「もっと多いように感じる」と話していました。



本荘由利地区の高等学校において、今年度は6校中4校から高等学校特別支援チームに依頼があり、いずれも複数回の訪問要請となりました。各校で気になる生徒の理解や対応への支援が必要とされており、2.2%という数値に対する先生方の感じ方にも納得できる気がします。

具体的な取組として、例えば矢島高等学校では、年間5回の校内委員会のうち、第2回と第4回への高等学校特別支援チームの参加を設定し、校内支援体制の機能向上を推進しています。個別の指導計画の作成やその後の実践と評価が計画的になされ、進級や就労等、課題が目前に迫ってからの対処ではなく、生徒への気付きがあった早い段階から理解と支援の手立てが積み重ねられています。年度当初に外部支援を計画しておくことで、校内支援体制がスムーズに進められ、突発的なことにも対応しやすくなるような効果的な取組になっています。



他の高校への支援でも、スクールカウンセラーや高等学校の教育専門監、本校進路指導主事と連携したり、知能検査の報告を進路指導に活用してもらったりなど、各校のニーズに応じられるように進めています。今後も工夫していきますので、より多くの学校に高等学校特別支援チームを活用していただければと期待しています。

(ゆり支援学校 教諭(兼)教育専門監 桐田 明日子)



「令和5年度全日本学校関係緑化コンクール」の「学校林等活動の部」において、県立能代支援学校が、準特選(国土緑化推進機構会長(衆議院議長)賞)を受賞しました。

県立能代支援学校のみなさんおめでとうございます。

